



企業の社会貢献

心と行動で地域に貢献 創業の地・茨城に恩返し セキショウグループ

創業の地への貢献にこだわり、経営者と地元出身の社員たちが恩返しの気持ちで行動することで、地域の人たちと共に繁栄し続ける企業が茨城県にある。今年、創業111年目の関彰商事株式会社を中核とする、セキショウグループ。

同社の地元への思いと活動を知ると、個人と同じように企業の社会貢献も、そこに相手を感じる気持ちや行動があることの素晴らしさを教えられる。(取材・文／塩瀬 潔泉)

入社したらボランティア経験

茨城県、福島県のほか、関東一円でも幅広く事業を展開するセキショウグループ。新人社員研修には、運営する介護施設でのボランティア活動が組み込まれているが、



つくばマラソンでランナーに声援を送る社員たち

うと同時に、それまでの自分を省みながら、本当に行ってよかったと思いました」

関正夫会長は、現在も県社会福祉協議会会長を務めており、その福祉に対する思いが伝わってくる気がしたという。そのような研修で何かを感じ取り、職場に出る社員たち

地域でマラソン大会が行われれば、グループ内の販売会社

が扱う自動車を貸し出すほか、その地域の拠点の社員が、給水所などのボランティアとして参加し、地元ランナーに声援を送る。もちろん、会社からの強制ではない。

「子どものいる社員は積極的に学校行事に参加するように」「来年開催される東京オリンピック・パラリンピックのボランティアに参加してみるように」といった通達が会社から出るので、子どもやボランティアのための休暇が取りやすい風土もある。

すべて地元・茨城への「恩返し」

1908（明治41）年に、創業者の関彰氏が燃料の販

まだその仕組みがなかった頃から、社員は入社するとまずボランティアを経験するように言われた。現在、総務部長兼秘書室長を務める石川喜代江さんも、その経験をした一人。身体障がいのある人たちと家族が遊園地に出掛ける行事で、一緒にバスに乗った。

「何をすればいいのか全くわからず、困惑しました。私は車いすを押したり、移乗のときにご本人の体を抱きかかえたりするのがやっとだったのに、最後にご本人が、声は出ないけれど手を差し出し握手をしてくださいました。日頃のご家族の苦勞を思

売を開始し、今では創業の地・茨城県で知らない人はいない規模に成長したセキショウグループ。東京に進出したのは、意外にも1992年。その歴史や時代背景、企業規模から見れば、かなり遅い印象だ。熟慮に熟慮を重ねての進出は、東京でビジネスを拡大しようという発想ではなく、東京の企業が茨城に拠点を持つ構想があれば情報をいち早く入手し、取引につなげるための戦略だったという。

すべての経営判断、地域貢献が、「地元・茨城のため」との信念に基づいている証しと言える。

「地域の皆様に支えていただいたからこそ、今のセキショウがある。会長や社長からは『ご恩返し』という言葉をよく聞きます」（石川さん）

地域の一人でもあるグループOBと社員は年に一度、交流会を行うほか、取引先との最初の縁など、社員が入れ替わっても忘れてはならないことを改めてOBに教えてもらうこともよくあるそうだ。

また、同グループでは社員の介護離職をきっかけに、現役世代が少しでも楽になり仕事を続けてくれるようにとの思いから、デイサービスなどの介護事業も展開しているが、OBの人たちはその送迎車両の運転などでも活躍している。

■セキショウグループの概要（2018年10月現在）

事業内容：エネルギー（石油燃料・ガス・電気等の販売、ガソリンスタンド運営など）、自動車販売、レンタカー、運輸、IT、空調・給排水設備工事、携帯電話、コンビニエンスストア、人材、介護福祉など／本社：茨城県筑西市、つくば市／創業：1908年2月／代表者：代表取締役会長・関正夫 代表取締役社長・関正樹／従業員数（グループ全体）：約2300名／グループ総売上高：1,600億円／拠点：茨城県、福島県のほか、東京都をはじめとする関東一円、ベトナム

●社員と会社で地元への思いを2倍に 「セキショウウふれあい基金」

セキショウウグループの代表的な地域貢献に「セキショウふれあい基金」がある。社員が自身の給与から任意で毎月1000円をこの基金のために積み立てる。そうして1年間に集まった金額と同じ額を、会社もまた基金に充てる。社員の思いと会社の思いで2倍になった金額を、身近な社会福祉活動に役立ててもらおうと、年1回、地元の複数の福祉団体等に寄付するものだ。

そして、社員がふれあい基金に関わることも大切に行っている。「お金を集めて代表者がそれを届ける、という形ではなく、地域の拠点の社員が贈呈の場に立ち会っています。地域の中にセキショウと自分がいるのだと実感することや、そこでまた地域の皆さんとの新たなつながりを持つことが大事」と広報部長の山口政美さん。

●スポーツ、芸術……筑波大学との交流

セキショウグループでは、地元の筑波大学ともさまざまな形で交流している。3年ほど前、同大学のグラウンドが土であるために体育会の練習が十分にできないことを知った関正樹社長が、人工芝敷設という物納寄贈を決

めた。1億5000万円をかけて出来上がった人工芝のグラウンドは、「筑波大学セキショウフィールド」として筑波大学が地元の人たちにも開放している。

また、つくばオフィスの一角にあるスタジオ'S with Tは、主に筑波大学芸術専門学群の学生のアトリエ兼展示の場として提供している。もちろん大学内にアトリエはあるが、学生も多いため、自由に使えるこのスタジオの提供は大きな作品を創作する学生を中心に大変喜ばれている。

毎年12月には、つくばオフィスの屋上に大きなサンタが1体ずつ増えていくという、以前から地元では有名な催しがあるが、近年、不定期で現れるサンタの情報をグループのホームページやSNSと連動させたほか、'S with Tで関連イベントも実施。クリスマスライブまで、子どもたちにスタジオでサンタ観測日誌を書いてもらう。また、夏と冬にキッズアート体験を開催し、日頃スタジオを使用している筑波大学の学生たちがこれらのイベントで運営を手伝ったり、来場する子どもたちと一緒にアートに触れるなど、世代を超えた楽しい交流の場となっている。

また関彰育英会は、将来、社会に貢献し得る人材を育成する目的で、研究者を目指す大学院の後期課程の学生

* * *

寄付や協賛をするだけで終わらず、一歩踏み込んで心と行動も一緒に届け、温かい絆を結ぶのがセキショウ流の社会貢献、地元への恩返しなのだと感じた。

取材中も、生き生きと話をしてくださった皆さん。しかし、本業以外にこれだけの社会貢献事業があると大変ではありませんか、とたずねてみたのだが、そんな雰囲気は全くなく、地元・茨城やグループに対する愛着にあふれていた。

●隣県福島に願いを込め、 社員たちが植樹

を支援しており、筑波大学など茨城県内の院生、同社の拠点があるベトナムの国籍を有する県内の留学生が対象だ。そして、これも単なる経済的支援だけではない。年に一度、セキショウ関係者と奨学生が集う交流会を催し、目標に向かって頑張っている学生同士がつながる場を提供している。

セキショウグループは早くから隣

県福島で事業を展開しており、県内44か所に拠点を持つ。昨年6月には「第69回全国植樹祭ふくしま2018」に協賛し、震災からの復興と環境緑化推進のために企業植樹を行った。当日は73名もの社員が参加して、将来、海岸防災林になることを願いながら250本のクロマツを植樹した。



植樹祭には多くのグループ社員が参加した



取材にご協力いただいた（左から）広報部長・山口政美さん、総務部主任・栗原明子さん、広報部主任・弓野亮さん、総務部長兼秘書室長・石川喜代江さん。取材時、筑波大学の学生の個展が開かれていたスタジオ'S with Tにて